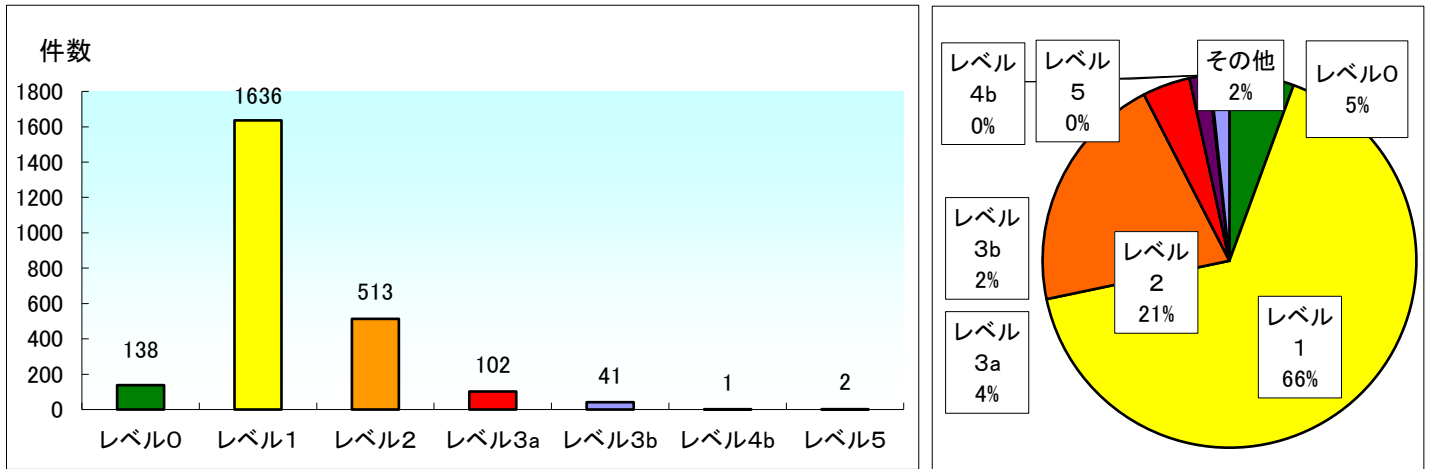


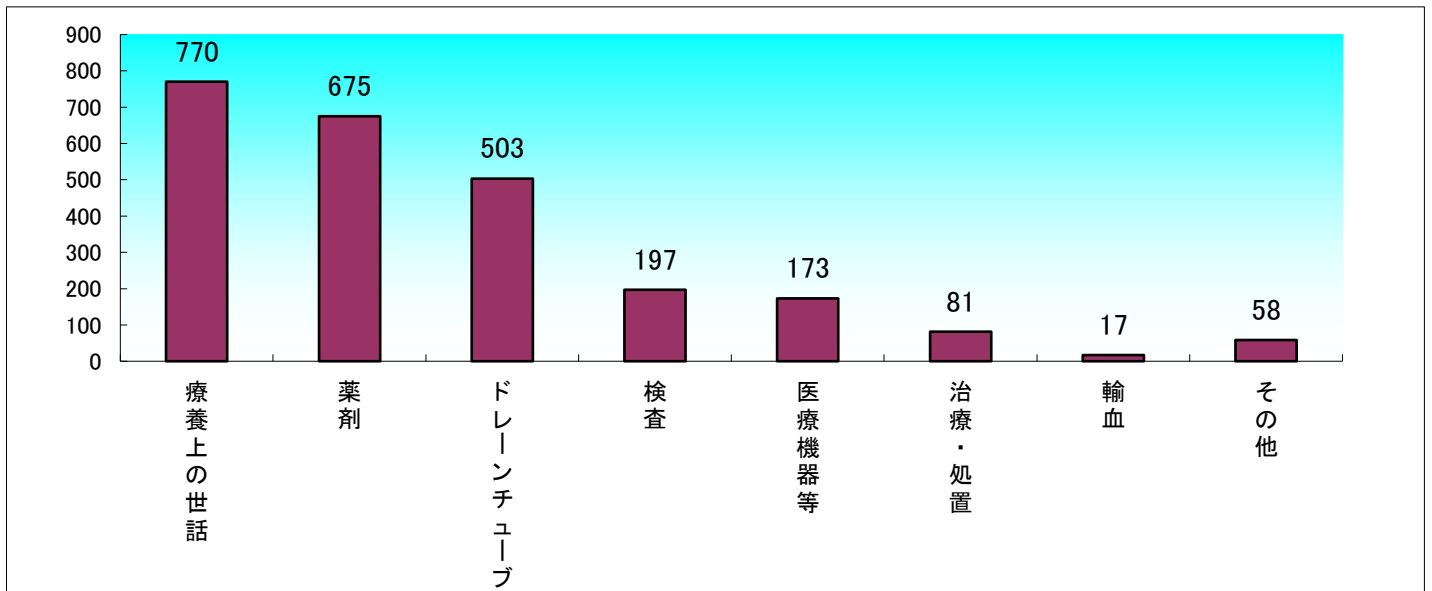
2025年度 年度集計報告（2025年4月1日～2026年3月31日）

1. 報告総数：2474件

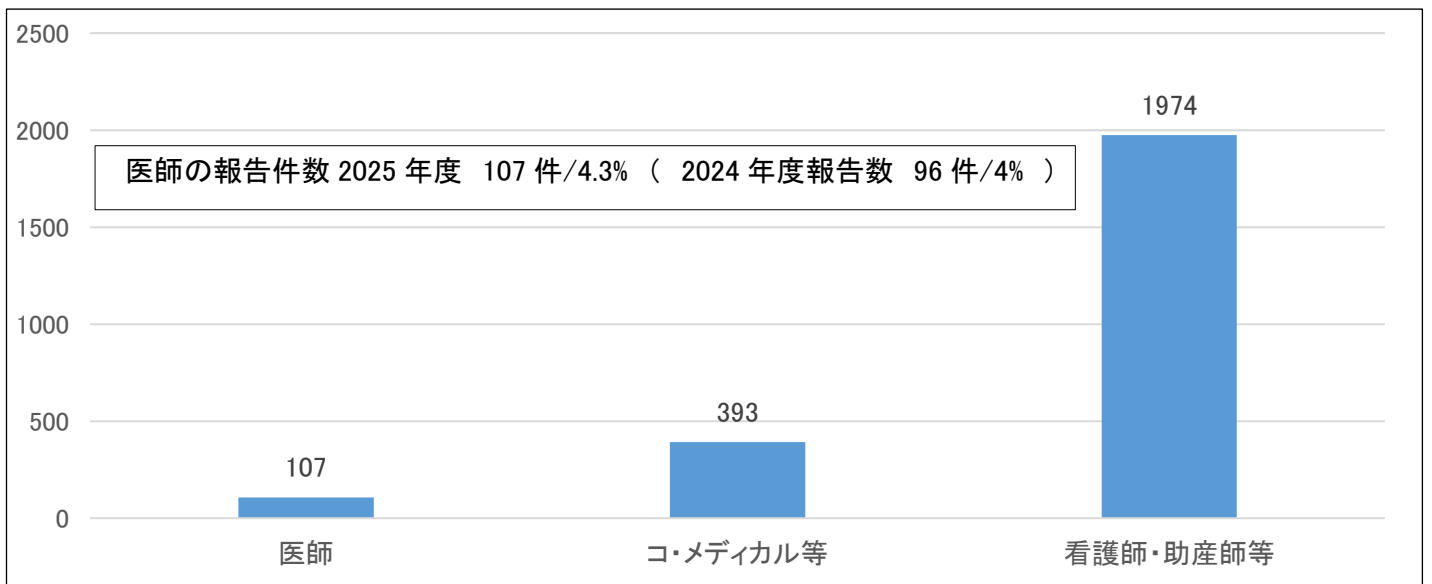
レベル別報告割合



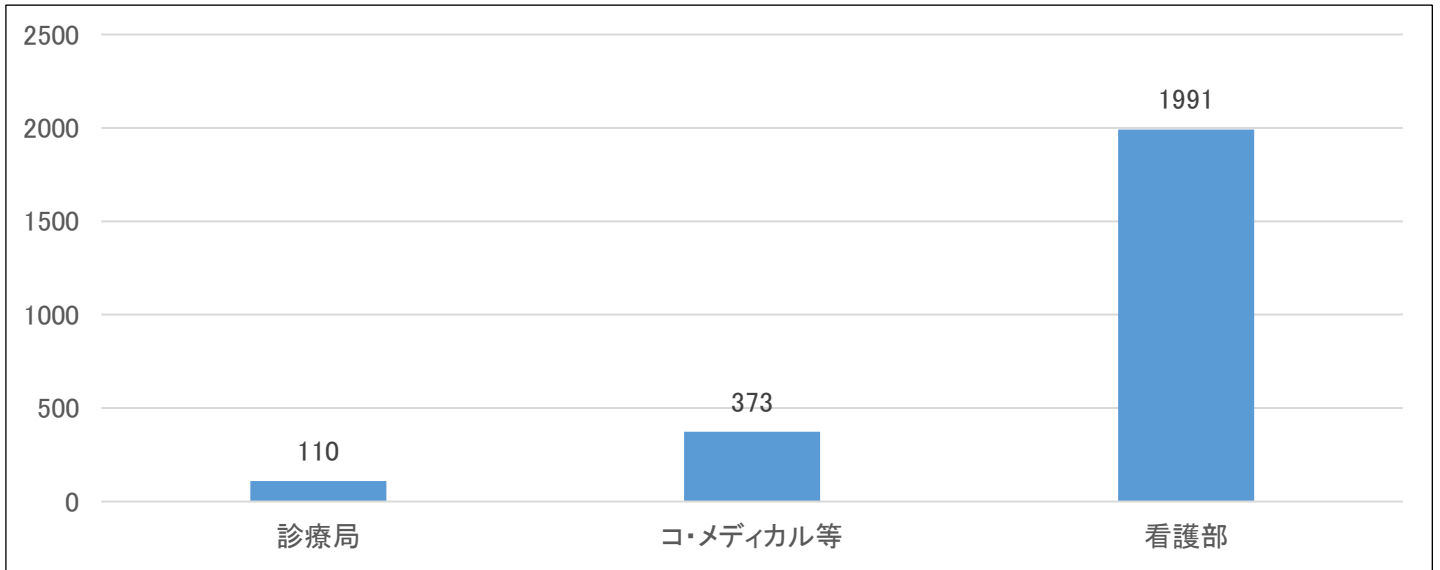
2. 報告概要別件数



3. 報告者別件数



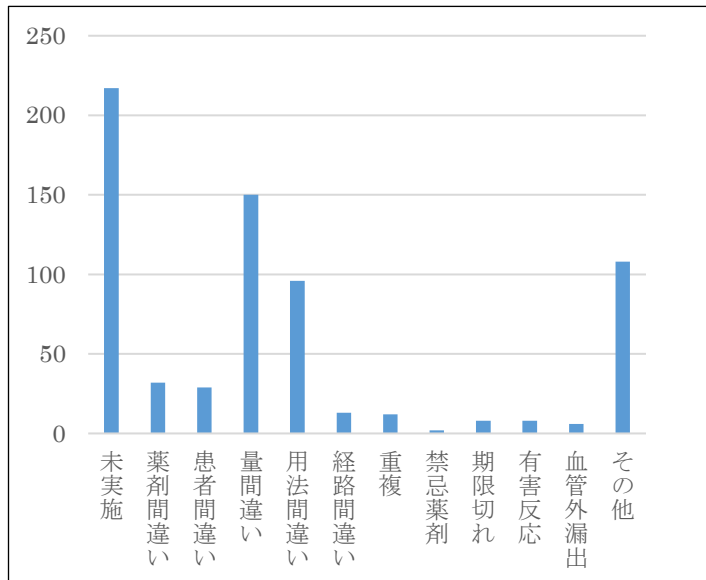
4. 当事者部署



5. 概要別件数

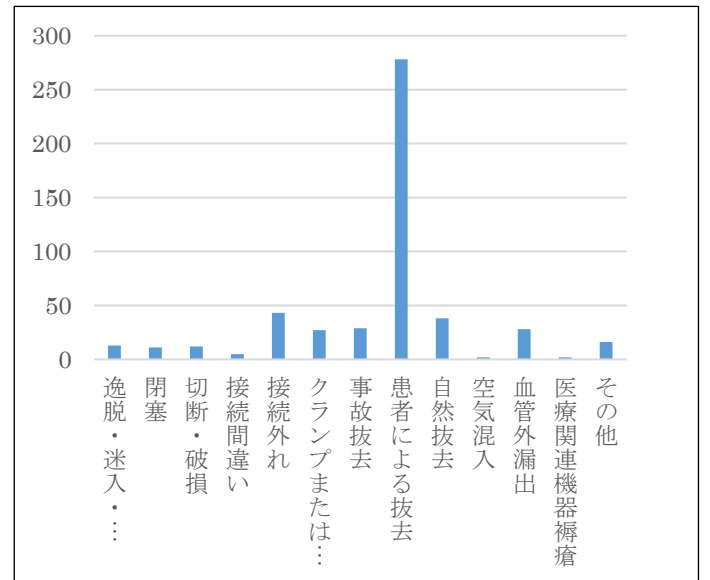
(1) 薬剤

675件



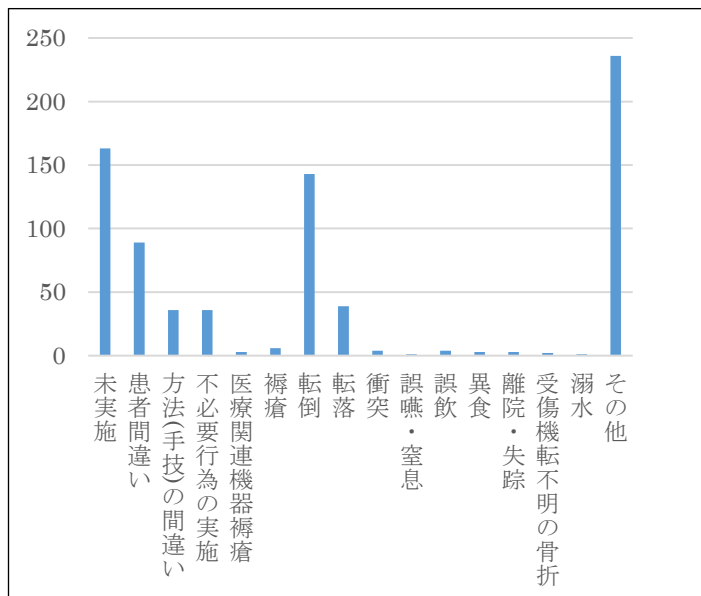
(2) ドレーン・チューブ

503件



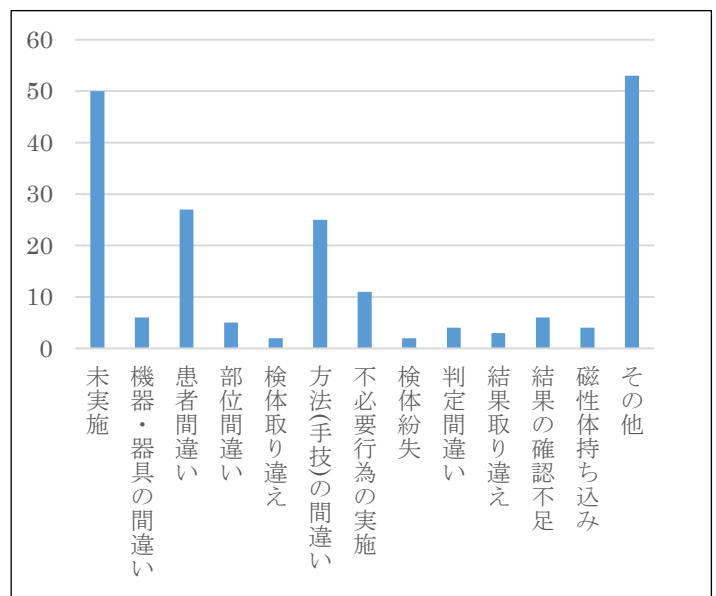
(3) 療養上の世話

770件



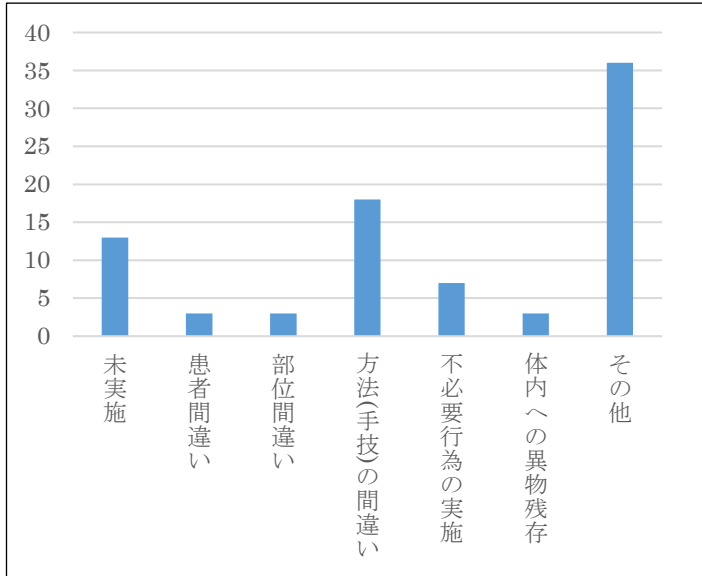
(4) 検査

197件



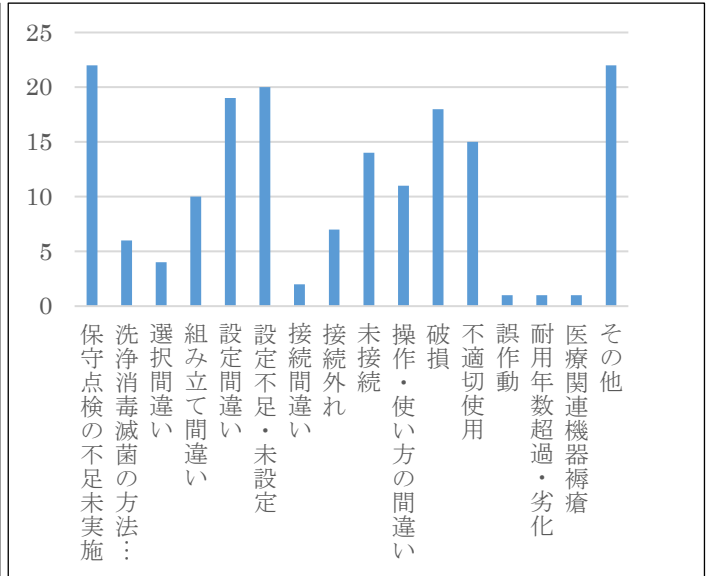
(5) 治療・処置

81件

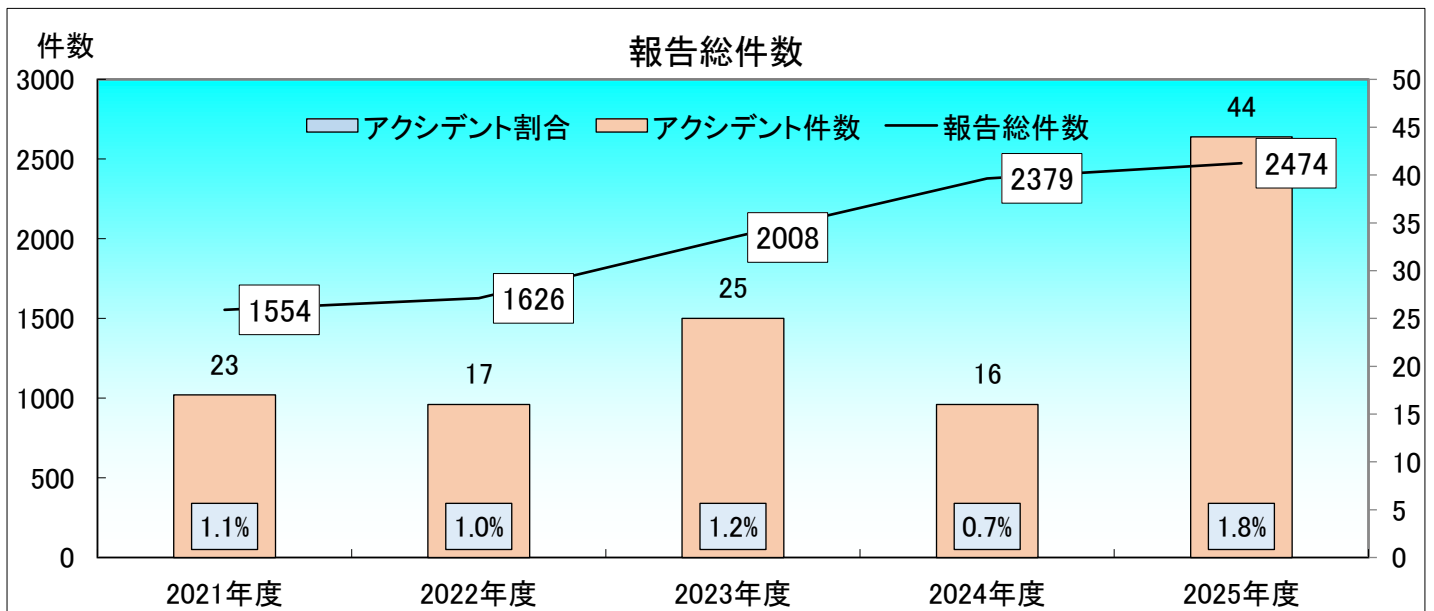


(6) 医療機器等

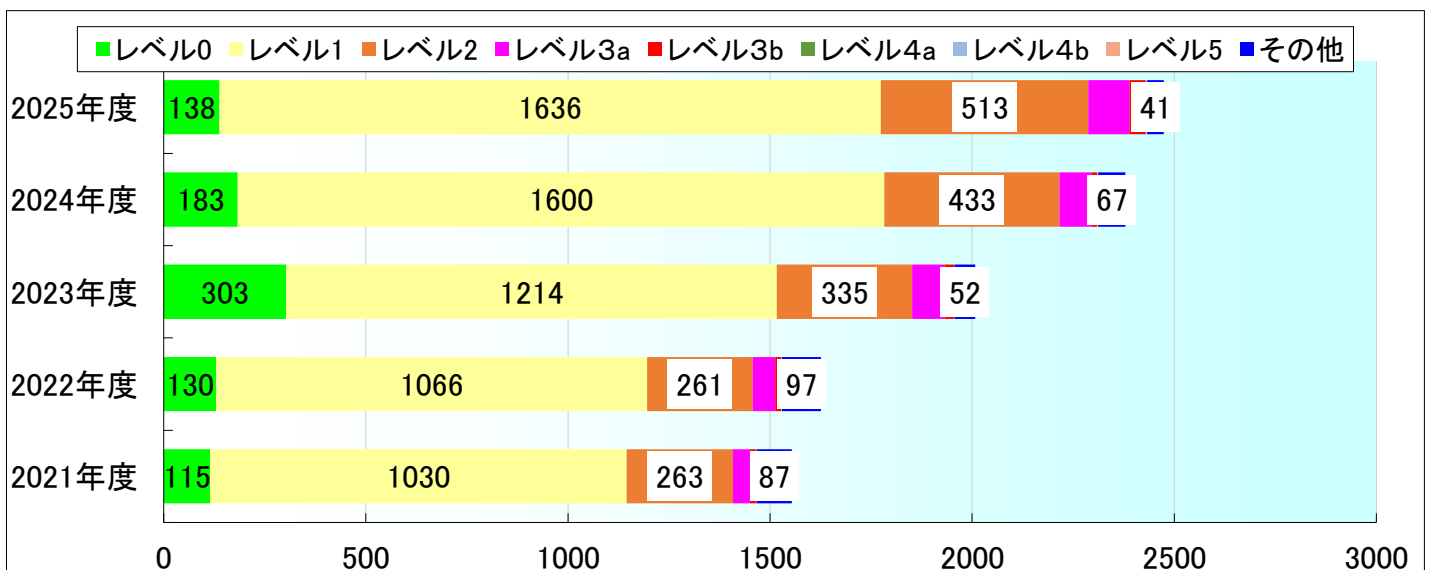
173件



6. 過去5年間におけるレベル3b 以上報告割合年度推移



7. 過去5年間におけるレベル別報告割合 年度別推移



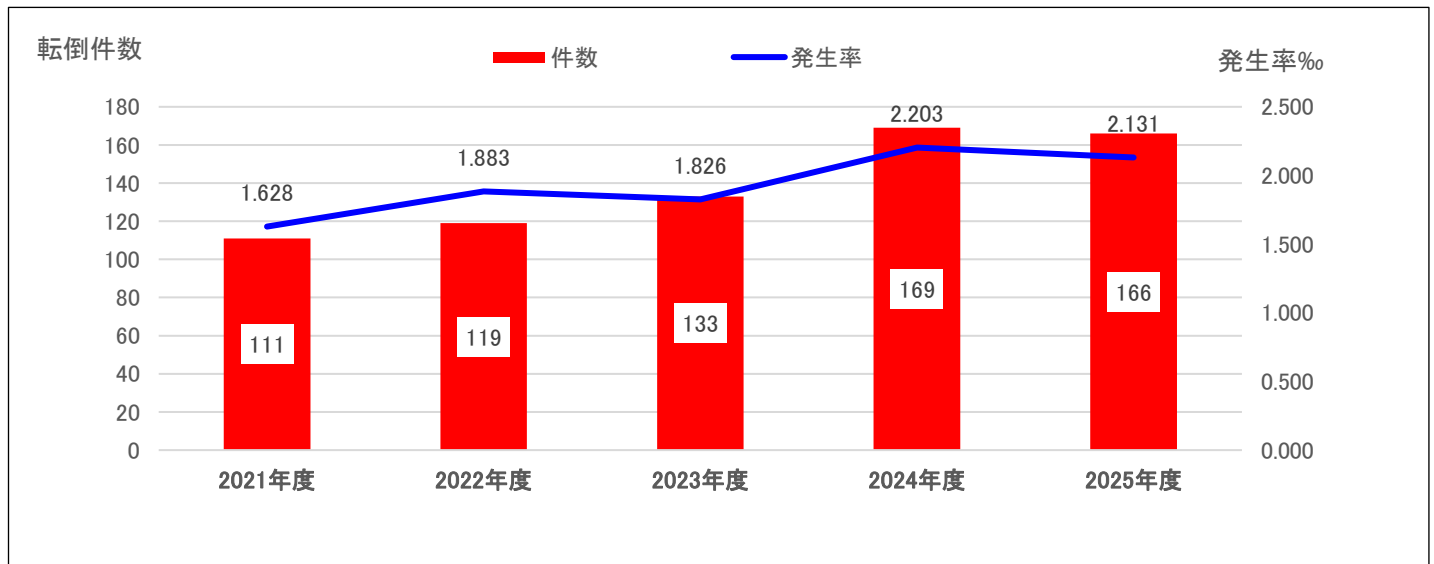
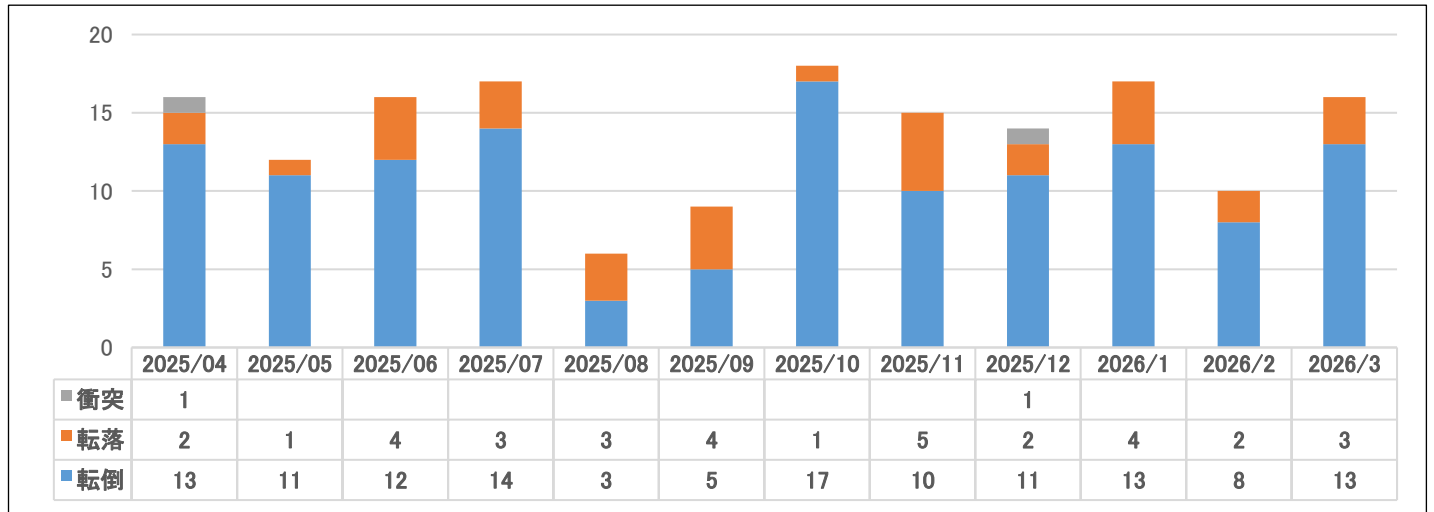
2025年度インシデントレポート集計 「総括」

- ア インシデント報告件数は2024年度2379件から2474件と95件増加した。
レベル別の割合は昨年と同様で、レベル1が全体の66%。報告内容別の割合も昨年と同様で、薬剤・療養上の世話、ドレーン・チューブが全体の78%となっている。
- イ 医師からの報告割合は2024年度4%から4.2%と同様。研修医に積極的にレポート提出するよう指導がされているが、2024年度22件から13件と減少している。今後の医療安全文化の醸成を考える上で、さらなる医師・研修医の報告件数の増加に期待したい。
- ウ インシデントレベル3b以上の事例は2024年度16件から42件に増加(同一事例に対する複数の報告を含む)事例の内訳は術後の出血など合併症・偶発症が全体の26%で事例によっては再手術を実施。いずれの事例も術前のICで、術後合併症について説明され患者・家族の理解を得られていた。
また、今年度は気管カニューレやシュアフーザー、CVラインの事故抜去等ドレーン・チューブに関連した報告が16%となっている。

2025年度 転倒・転落集計報告(2025年4月1日～2026年3月31日)

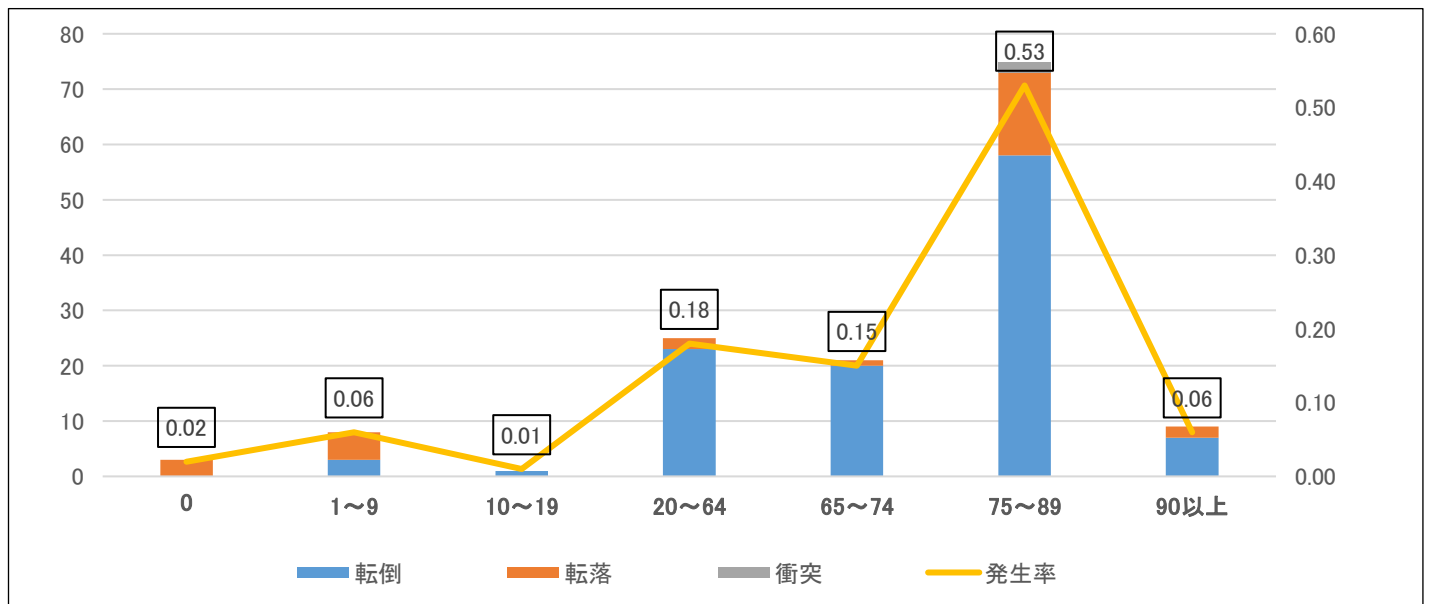
報告件数:166件 転倒:130件 転落:34件 衝突:2件

1. 月別・年度別

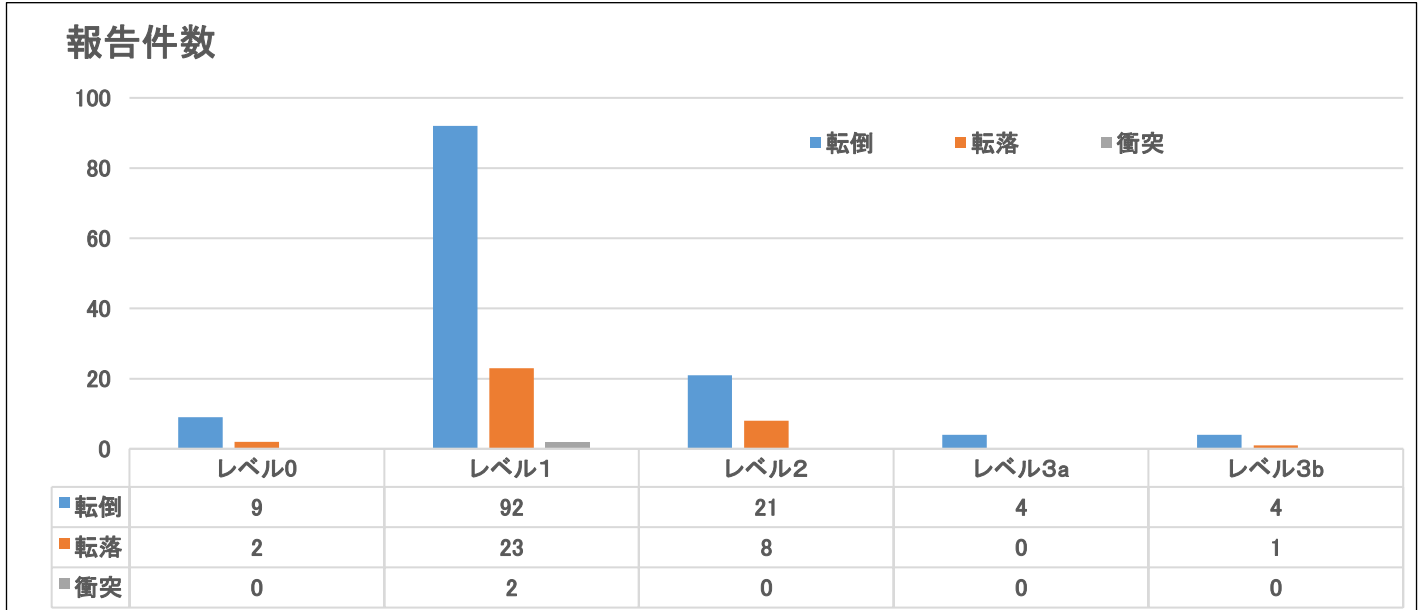


2. 年齢別報告数と発生率

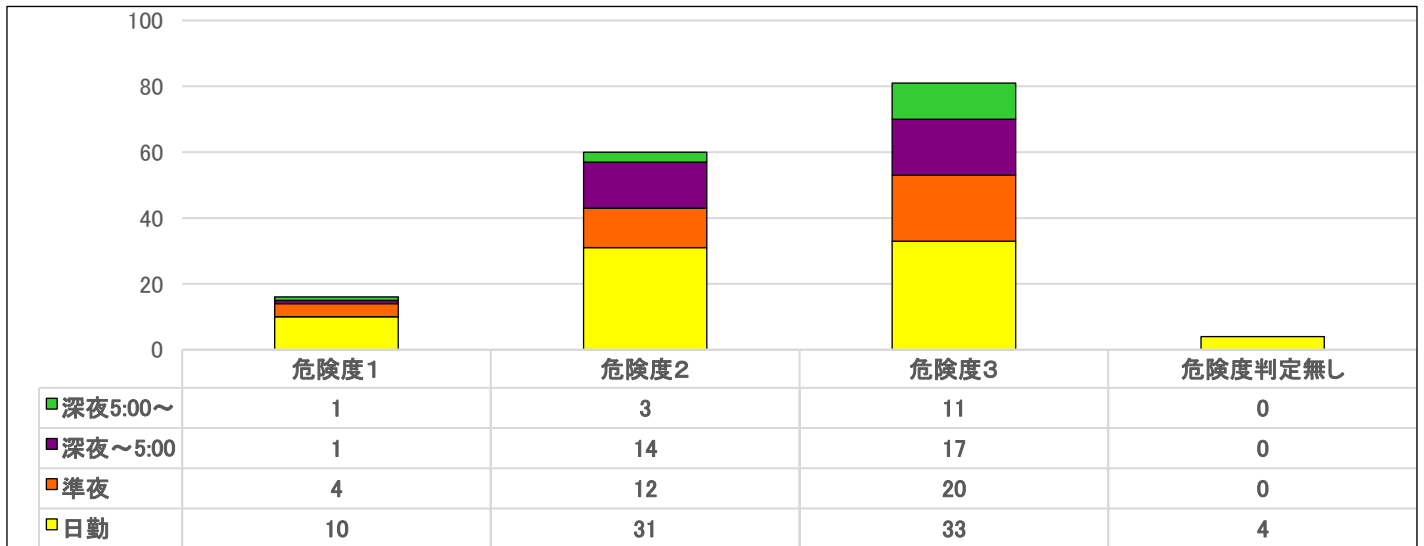
発生率(‰) = 転倒・転落入院患者数 / 入院延べ患者数 × 1000



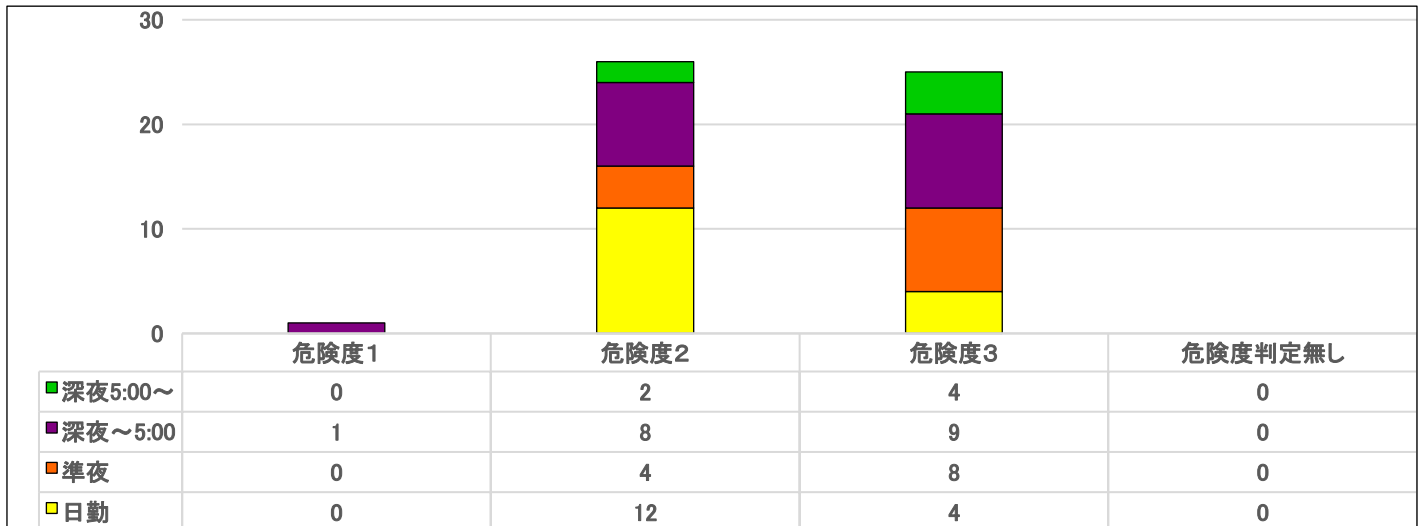
3. レベル別



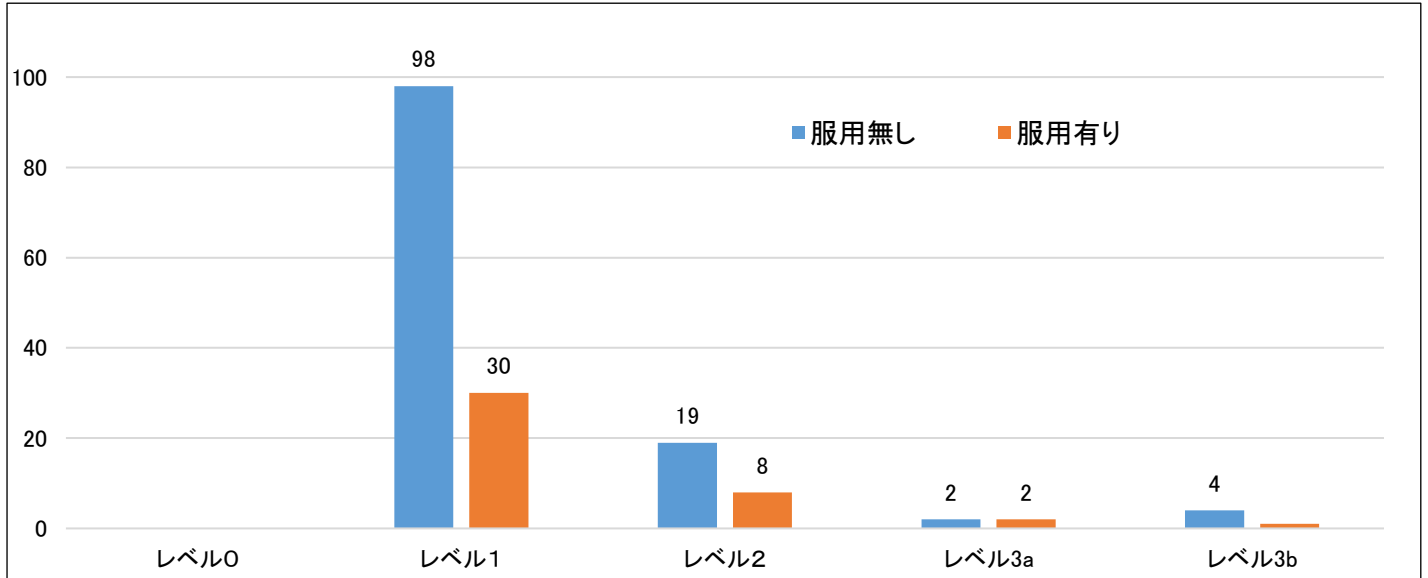
4. 危険度別発生時間



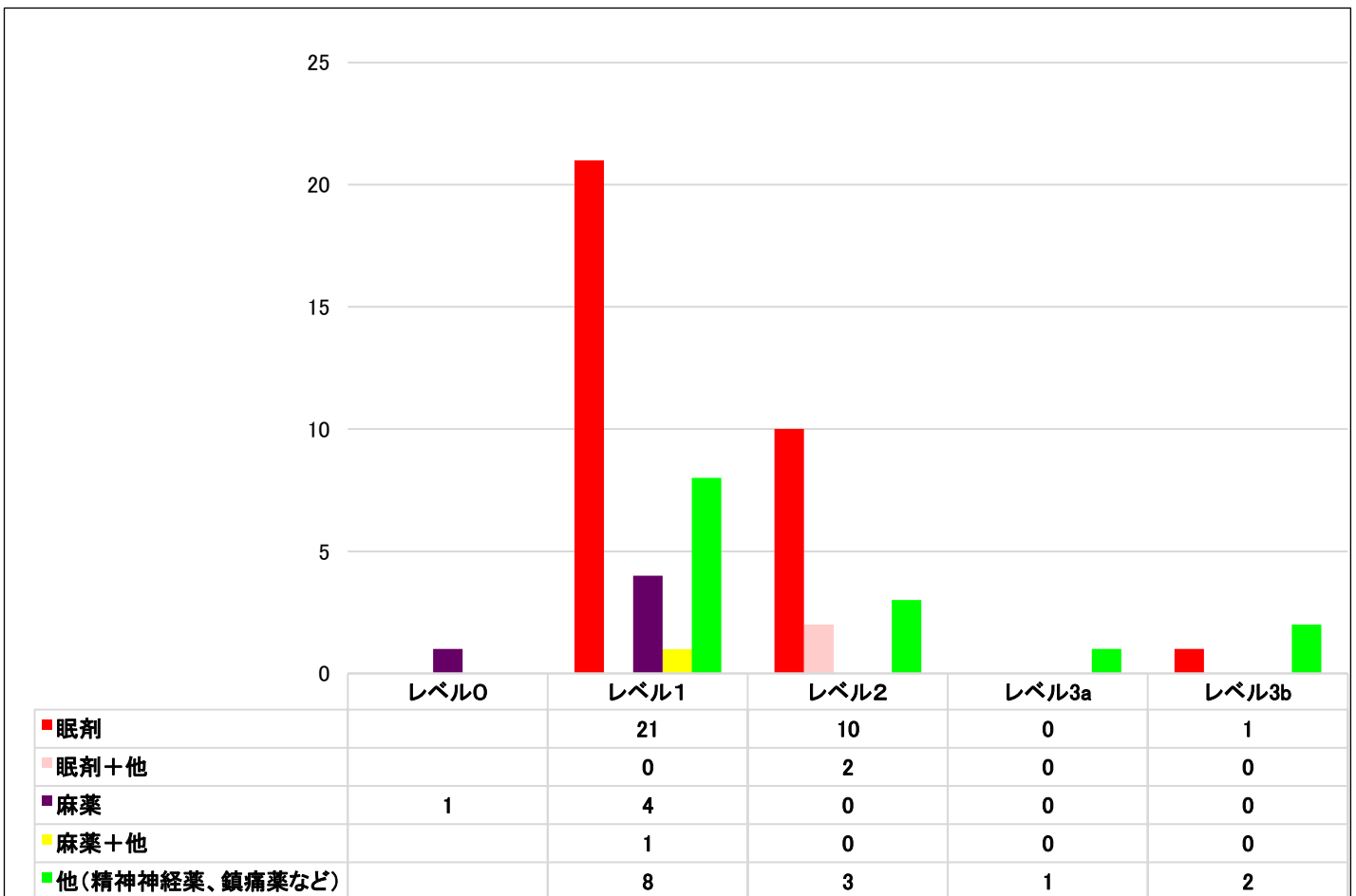
5. 危険度別発生時間（排泄行動）



6. 薬剤服用別



7. 薬剤別



- 2025年度当院の転倒転落発生率は2.13%で2024年度QI指標の平均値2.93%を下回っている。また、レベル3b以上の事例における損傷発生率は0.064%でQI指標の平均値と同様の発生状況だった。
- 2025年度のレベル3b以上の転倒・転落患者は5件(昨年度5件)だった。
いずれの事例においても医師から患者の家族に事故の経緯について説明され、治療方針を含めた理解・協力が得られていた。
- 年齢別発生率では、75歳以上の高齢者の割合が74%(昨年度63%)
高齢者の転倒は、看護師の付添いなしでの排泄行動や更衣時に多い。入院後は、高齢者の環境変化に対応できるようアセスメントの強化が必要。また、転倒しても骨折等を発症しないよう衝撃吸収マットを病室や車椅子トイレに設置して取り組んだ。
- 0歳は転落のみで、付き添いの家族に対してベッド柵を上げておくことの重要性を繰り返し周知する必要がある。
- 危険度別発生時間では、危険度2および危険度3の発生割合が日勤で高い。一方で排泄行動では危険度1と危険度2の発生割合は日勤が高いが危険度3では夜間に発生している。
※危険度＝転倒・転落アセスメントスコアシートを用いて、入院時、患者状態変化時に算定する。
- 服用患者の報告では、眠剤を服用の割合が全体の約6割を占めていた。また、精神神経薬・鎮痛薬を服用していた患者数は、昨年度6件に対し今年度は14件で増加した。入院患者の高齢化により、せん妄や不穏による精神神経用薬の服用例があり、管理体制に注意が必要と思われる。